
三銃士

レオ

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

三銃士

【Nコード】

N06470

【作者名】

レオ

【あらすじ】

地元でかなり有名な元不良少年が高校に進学後、甲子園を目指すことになる。おぼっちゃま、名門野球部で大暴れ。

第一話「だりい…」

ここは東京都の西東京地区に所在をおく、野球の名門・鷺宮高校

昨年の夏の甲子園で、世間を賑わせた「三銃士」をプロ野球とメジャーリーグの傘下、マイナーリーグへとそれぞれ輩出させ野球界でもまた、他業界でも知らない人はいないと言っていいほど、有名なのである。

そんな中、昨年の甲子園優勝投手でエースであつた齋藤啓蔵が稲田大学へ進学したために抜けて安定した絶対的エースがいなくなったのが唯一の不安材料でもあつた。

部活動を挙げ、コーチも必至に全国中学で有名選手から無名の選手まで検索にあたっていたが見つかるのは中学。。だったというバッターばかりで投手はもう駄目なのかと諦めていた矢先のできごとであつた…。

そんな中物語は、動き出す。

ベットの香りが、名残惜しいそんな新し春の朝がやってきた。
鳥のさえずりが窓から日光とともにうかがえた。

下の台所から母親の呼ぶ声がする、降りて行ってみると下には今日から中学2年に進学した妹と親父が食べて行つた朝ごはんの片づけをする母親のいつもの光景が目に見え込んだ。

「ちょっと高校初日から遅刻するわよ」

母親が鬱陶しそうにお玉を持っていたその手で時計を指す。

「……ちっ！わってるよ」

いつも遅刻の常習犯で成績は最悪その上、他校との生徒とよくめ事を起こすという、中学時代だったので家族から邪険に扱われていた。

そう…

あのおっさんと会う日までは…

唯一、まともに構ってくれる存在でもあったあのおっさんだ

朝から母親にうんざりするようなことを言われた俺…そう…俺じやあ、物語の進行へ差し支えるからちよっくら名前でも紹介しておこうか

俺の名前が他人のあんたらに伝わるなんてめったなことはないからな

ありがたく思えよ！

俺の名前は――^{このまえはじめ}16歳！地元では名の通った不良だが、何故か名門鷺宮高校への進学を決めた。

「ちつ、今日からまたくだらねー学校か…」

間に合う時間に来ているものの進んで校舎にはいる気持ちにはなれない、
そこは中学生のときの習慣でいきなり変わるわけがなかった。

周りには真面目に校門へと吸い込まれて行く生徒ばかりだったが未だに勉強に励むものの考えの理解がはじめには、疎かったのであつた。

そんな中、珍しく声をかけるものが現れたのだ不良の修正からか朝っぱらから因縁を付けられたと思ひ込んでしまったのだが
相手は見覚えのある顔であつた。

「ああ、朝っぱらから相変わらず、血の気が多いいこと」

「るっせー、てめーにだけはいわれたくねえ」

「今日は喧嘩をしにきたんじゃない。野球をやりにきたんだ」

「あ？そうか…じゃあ」

「ま、までよー。お前も変わっちまったな……。まあ無理もない
か中学2年のときにあんな言いがかりをつけられて
部を追い出されちまったんだっ…」

言いかけたセリフの中突然、はじめの右アッパーが飛び、当たり一
面血の海となり、登校時刻だった女子生徒が特に悲鳴を挙げた。

「何をやってるんだ。お前たち」

入学早々教師にも目を付けられてしまったため、高校でもまた有名な
不良になることは間違いないと確信をした二人であった。

ただ、目を付けた奴（教師）が今回ばかりは二人にとってほんの少
しラッキーだった…。

そんなこんなでおとなしく連行されて入学式前に関わらず、職員室
にいる。

「で？貴様ら登校初日だというのに何だ、その頭は…金髪と…モヒ
カンか」

二人は悪びれた様子はひとつもないので、全く反省していない様子
である。金髪のほうがはじめである。

「しかも、えーと、草壁だったけ。貴様は野球部に合格しておるじゃないか」

「ん？野球部…」

「ああ。監督、こいつ中学校まで野球やってたんだ。俺こいつが一般で入学したっていう噂、試験のあとに昔の達に聞いてさ、ついつい嬉しくなって、さっき登校時に誘っちゃったんだ」

「で、ついついそこでいざこざがあって喧嘩になったと」

厳しく鋭い目つきで二人を睨み付けるが危害を加えたはじめへの視線が大半であった。

「おい、おっさん。早く退学にしてくれよ」

はじめは面倒くさいといわんばかりにこの一言を発してしまったが状況は急展開していった。

「おめー。いま、野球やってたっていったよな」

はじめはガンをつけるといような表情を目の前にいる小柄なおっさんに、向けたとたん入学式の準備で忙しかった教師は手を休めてこちらを心配そうに凝視する。

「入学式まで時間があるし、ちょっと、遊んでやるわい」

というと、バットとボールとグローブを3人分用具箱から出し、はじめたちに投げつけた…。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0647o/>

三銃士

2010年10月10日00時52分発行